

農村社会における普及指導員の コーディネート機能

THE COORDINATION ROLES OF EXTENSION OFFICERS WITHIN JAPANESE AGRICULTURAL COMMUNITIES

内田 由紀子¹・竹村 幸祐²・吉川 左紀子³

¹Ph.D. (人間・環境学) 京都大学こころの未来研究センター准教授 (E-mail:yukikou@educ.kyoto-u.ac.jp)

²Ph.D. (文学) 京都大学こころの未来研究センター特定研究員 (E-mail: boz.takemura@gmail.com)

³Ph.D. (教育学) 京都大学こころの未来研究センター教授 (E-mail: say@educ.kyoto-u.ac.jp)

日本の農村社会において技術指導ならびに関係者間のコーディネート業務を行っている普及指導員の役割について検討した。近畿の普及指導員が回答した調査から、関連機関や農業者同士の連携など、コーディネートに関わる普及活動が地域の問題を改善している可能性が示唆された。また、コーディネートに関わる感情経験ならびに普及指導員間の知識・技術伝達についても検討したところ、地域住民同士の信頼関係が業務内で普及指導員の感じるポジティブ感情を高めること、さらには対人的スキルのある普及指導員が評価され、そうした先輩の存在が普及活動にポジティブな効果をもたらすことが明らかにされた。日本の農村社会において、人をつなぐ役割の効果と、普及指導員の持つスキルについての考察を行った。

キーワード：普及指導員，農村社会，コーディネート機能，ネットワーク

1. 問題

日本における人間関係や社会構造については、しばしば「相互協調的」「集団主義的」「関係志向的」とであると指摘されている（たとえば北山¹⁾、濱口²⁾など）。周囲との協調性を重んじるメンタリティーを作り出してきた一つの要因は、定住型で流動性の低い「農耕文化」であり、関係志向や周囲に注意を向ける傾向を生み出してきたことが指摘されている（Nisbett³⁾）。農村社会においては、変化の少ない安定した共同体のネットワークが構築されており、そうした社会構造の中で有効に働く関係志向的なメンタリティーが広く見られる可能性がある。

しかし近年は農業人口の減少や、農業生産についての課題が山積する中で、農業者である個人が新たな取り組みに内的な動機づけを持って取り組むことが求められる場面が増えてきた。しかし、そうした個人の判断による意思決定とそれに基づく新たな取り組みは、関係志向性をベースにする農村社会においては必ずしも容易ではないであろう。さらには、集落営農や地域でのブランド作りなどによる取り組みが求められるようになってきたが、そもそも定住型で流動性の低い農村社会においては、新しいつながりの形成には大きな労力が必要であると考えられる。

このような中、新たな取り組みについての個人の意思決定に関わるような技術伝達を行うと同時に、地域のつ

ながりの生成・維持や集落営農の支援（森本⁴⁾、上田⁵⁾）などを職務とするのが「普及指導員」である。つまり普及指導員は、農業に関する高度な技術と知識の伝達を行う「スペシャリスト機能」と、相互協調的な農村社会の中でネットワーク作りの支援を担う「コーディネート機能」の双方を期待されている（農林水産省⁶⁾）。

スペシャリスト機能とコーディネート機能という異なる次元での役割を持つ普及事業の職務は、実際の農村社会においてどのような形で実践され、どのような役割を持っているのだろうか。本研究では相互協調的な農村社会におけるネットワークの生成・維持を支援する普及指導員のコーディネート機能を検討する。

加えて、本研究ではコーディネート機能に関わる業務遂行に必要な要因として、普及指導員自身の業務上での感情経験ならびにロールモデルについて明らかにする。前者は普及指導員の動機づけが何によって高められているのかを、後者はコーディネーターとして農業者に働きかけるスキルが普及指導員の間でどのように評価され、伝達されているのかを明らかにする。これにより、普及指導員個人、あるいは普及指導活動全体におけるコーディネート機能の持続可能性を検証する。

従来社会心理学が対象としてきた信頼形成、合意形成、説得的コミュニケーション、リーダーシップなどの視点からも、農村社会において人と人をつなぐ、人の心を「動かす」機能を果たすことを目指している普及指導員

の持つ役割を検証することには意義があると考えられる。

1.1. 普及指導員の活動内容

普及指導員とは、普及指導員国家試験を経て認定された都道府県の職員である。その数は2010年現在全国で約8000名である。普及事業とは「農業技術・経営に関する支援を、直接農業者に接し行う事業のこと」とされている（農林水産省⁶⁾。Fig. 1の協同農業普及事業の仕組みにあるように、普及指導員は農林水産省や各都道府県の研究機関、農業大学校、都道府県主務課と連携してその事業を行っている。1948年にアメリカの農業政策をモデルに導入された普及事業は、以後60年以上にわたる普及活動を通して日本の農村社会において固有の役割を果たしてきたと考えられる。

「協同農業普及事業の運営に関する指針」（平成22年4月9日農林水産省告示第590号⁶⁾）には、普及指導員が、1) 「スペシャリスト機能（農業者に対し地域の特性に応じて農業に関する高度な技術及び当該技術に関する知識（経営に関するものを含む。）の普及指導を行う機能）」と2) 「コーディネート機能（地域農業について、先導的な役割を担う農業者及び地域内外の関係機関との連携の下、関係者による将来展望の共有、課題の明確化、課題に対応するための方策の策定及び実施等を支援する機能）」の双方の機能を併せ持つと述べられており、技術指導だけでなく、関係機関との連携や協同について促進するコーディネーターとしての機能を併せ持つことが示されている。

また、普及活動は農家だけではなく、社会全体の公的産業としての農業に働きかけるものとされている（藤田⁷⁾）。全国農業改良普及支援協会のホームページ⁸⁾の「普及指導員は、こうした産地を発展させたり、新たな産地を作るよう農業者等を仕向けたり、さらに地元の農協や市町村と連携して、農業者の組織化支援などのコーディネート活動を行っています」という記述には、普及指導という仕事が日本の農村社会において人と人の心を「つなぐ」役割を担ってきた職務であることが示されている。

1.2. 本研究の目的

(1) コーディネート機能に関わる支援の有効性

普及指導員はコーディネート機能を持つものとして定義されているものの、実際にコーディネート機能がどのような課題にどこまで有効であるのかについて実証的に検討された知見は存在しない。そこで本研究では普及指導員への調査研究を通じて、コーディネート機能に関わる普及活動を行うことが、そうでない場合と比較して、農村社会の様々な課題の解決に貢献していると認識されているか検証することを主目的とする。コーディネート

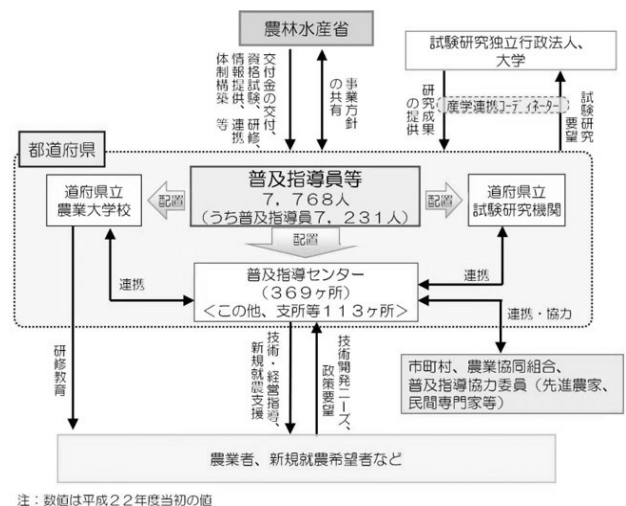


Fig. 1 協同農業普及事業の仕組み（農林水産省普及事業ホームページ⁶⁾より転載）

機能の有効性を検討する上で考えられる手法に、農業者等を対象とした調査を実施し、コーディネートに関わる活動を受けた場合と受けていない場合の農業者の満足度等を比較することが考えられる。しかし、多くの普及指導員はあくまでも農業者を「主役」とすることを重視し、必ずしも表に立つものではないと教育されているということが予備的な普及指導員へのインタビューにより明らかになった。その結果として、普及指導員の活動の詳細は、必ずしも農業者の目に触れていない可能性がある。たとえば関係機関との調整などについては、農業者自身には明確には認識されていないかもしれない。そのため、具体的にどのような支援活動を行った時に効果が得られやすいかを検討する上で、農業者を対象とした調査ではおのずと限界が生じる。しかし一方で、普及指導員自身を対象とした調査には普及指導員自身の固定観念や認知的なバイアスが含まれる可能性がある。そこで本研究では、そうした影響を可能な限り軽減するべく、次の手法を用いた。まず、過去のいくつかの普及活動上の課題（集落営農作りや新しい技術開発、人材不足の問題）とその際に行った支援の種類（技術指導や地域における連携調整等）を各普及指導員に尋ねた。その上で、コーディネートに関わる活動の効果を直接的に尋ねるのではなく、その時の活動全体を通しての成果を尋ねた。そして、コーディネートに関わる支援を行った群と行っていない群で成果についての評価を比較することとした。普及指導員のコーディネート機能が重要であるとすれば、特に関係機関との連携調整や農業者同士の連携を行った普及指導員とそうでない普及指導員を比較した時に、知覚される状況改善度や住民満足度が前者でより高くなっていると予測される。成果の指標があくまでも主観的指標であるという限界はあるものの、認識そのものを直接的に尋ねる手法に比べ、回答者個人の思い込みの影響は軽減さ

れると期待できる。

(2) コーディネート機能に関連する要因の検討

a. 普及指導員が業務の中で感じる感情

コーディネート機能を担う普及指導員は日々の業務の中でどのような感情を感じているだろうか。幸福感や達成感、満足感など、ポジティブな感情を感じるが多ければ多いほど仕事に対する動機づけが高くなると期待される。逆に、日々の業務の中で、悲しみや不安、挫折感など、ネガティブな感情を感じるが多ければ多いほど、仕事に対する動機づけが低下することが考えられる。普及事業がその機能を十全に発揮するためには、その担い手である普及指導員がその職務に高い動機づけで臨む必要があることは自明で、その意味で普及指導員の日々の感情経験の規定因を明らかにすることは重要である。普及指導員のコーディネート機能は、特に地域の農業者間、もしくは農業者と地域の関連機関との関係性に働きかけるものであると考えられる⁶⁾。このようなコーディネート機能が重要であるとすれば、実際に地域内での互いのつながりが増し、地域住民同士の信頼感が強くなったときに、普及指導員の業務内で感じるポジティブな感情が増加し、新たな動機づけにつながっていることが予測される。

b. コーディネート機能のスキル伝達について

職業における目標形成や、仕事上のスキルの獲得において、ロールモデル（職種や役割における模倣・学習の対象となる人、憧れ・理想の対象）の存在は重要であると考えられる。特に普及指導員においては、地域や農業者を動かす「説得力」が重視され、そうした能力に優れた指導員がロールモデルとして重要な役割を果たしていると考えられる（e.g., 川俣⁹⁾）。

また、先輩普及指導員に付き添われての On the Job Training (OJT) の重要性は、普及活動の分野においても繰り返し指摘されている（e.g., 近畿ブロック普及活動研究会^{10),11)}、全国農業改良普及協会¹²⁾）。OJT の最も直接的な効果のひとつとして、キャリアの浅い普及指導員が先輩普及指導員の仕事を直に見る機会を持つことで、明文化しにくい知識・技術の伝達が容易になることが挙げられる。実体験や直接的な観察が知識・技術の獲得において重要な役割を果たすことは論を待たない。特に、コーディネート機能に関わる普及活動で不可欠なスキルは対人的なものが多く、そのため明文化して伝えにくく、OJT が効果を発揮しやすいと思われる。本研究では普及活動の対象となる農業者に対して対人的スキルを持って接するような特徴を持つ先輩の存在が、本人の普及活動の成果にも影響しているかどうかを検討することを通して、コーディネーターとしてのスキルが普及指導員の間でどのように伝達されているのかについて検討する。

2. 方法

2.1. 調査対象

上述のような目的の下、本研究では普及指導員を対象とした調査を実施した。普及指導員自身が対象となることにより、その活動に対する客観的評価が得られないという限界があることについては十分に留意するべきである。しかし同時に、普及指導員を対象とした調査を実施することには下記の利点があると考えられる。まず、過去に実践した普及活動の内容ならびにその自己評価に関するデータを収集し、評価の分散を説明する要因を探ることにより、「コーディネート機能」に関わる普及活動（関係機関の連携調整等）の重要性・有効性について間接的に検証することが可能になる。加えて、スペシャリスト機能とコーディネート機能という異なる役割を期待される普及指導員自身がその業務をどのように捉えているのか、またどのような場面で業務上での動機づけを高めているのかを知ることにより、普及指導員自身のコーディネーターとしての業務上の動機づけや、その伝達に関わる要因を精査することができる。さらには、農業者を対象とする場合、普及指導員の実際の活動を農業者が正確に把握できていない危険性に加え、地域差や農産物、農業経営規模による差異が大きいというリスクも存在すると考えられる。農業者に比較して、普及指導員は公務員として農業政策に基づいた活動をしているため、地域差や農産物による分散は農業者に比較して小さいと考えられる。

2.2. 調査概要

2009年7月上旬～8月上旬に、SurveyMonkey社のサービスを利用してインターネット上に質問票を設置し、近畿農政局ならびに各府県の主務課を通して質問票サイトのURLを近畿6府県の普及指導員に告知した。また、質問票サイトにアクセスして回答できない場合のために、同じ内容の質問票の電子ファイルを普及指導員にEメール等で配布した。調査対象は近畿6府県の普及指導員616名であり、有効回答数は319名（有効回収率51.8%）であった。全有効回答者のうち、男性は201名、女性は58名、無回答は60名で、全体の60%強を男性が占めていた。2007年度調べの近畿圏内の普及指導員全体の分布は男性75.9%、女性24.1%であり、無回答者をのぞいて分布の偏りを調べたところ、有意ではなく（ $\chi^2=0.59, ns$ ）、母集団とマッチしていることが明らかになった。また、本研究の回答者の各年代の比率は40代が最も多く（111名）、次いで50代（77名）、30代（58名）の順で多く、20代（9名）と60代（7名）が少なかった。年代については、近畿圏内普及指導員全体では20代が全体の5.6%、30代が29.2%、40代が39.4%、50代が25.2%、60代が

0.6%となっており、今回の回答者は母集団よりも30代が少なかった($\chi^2=14.27, p<.006$)。ただし、本調査では無回答層が17.9%いるため、実際に回答者層と母集団と異なっているかどうかは明らかではない。

2.3. 調査内容

(1) 地域の抱える問題と支援

普及指導員が過去に経験した状況で特に難しい課題に直面した時の問題のタイプ14項目(「生産技術に関する問題」「ブランド作りに関わる問題」「農業者の収益・経営状況に関わる問題」「農業の担い手不足」「地域全体の活性化に関わる問題」「集落営農推進に関わる問題」「農業者の意識改革」「食の安全・安心に関わる問題」「新規事業の開始・規模拡大に関する問題」「女性参画に関する問題」「新品目の導入に関する問題」「地域内の人間関係に関する問題」「市場の状況に関わる問題」「その他)とそこで実施した支援14項目(「農業の担い手の育成及びその将来にわたる経営確立に向けた取り組みに対する支援(以下、農業担い手の育成)」「望ましい産地の育成に向けた取り組みに対する支援(以下、望ましい産地育成)」「環境と調和した農業生産に向けた取り組みに対する支援(以下、環境と調和した農業)」「食の安全・安心の確保に向けた取り組みに対する支援(以下、食の安全・安心)」「農村地域の振興に向けた取り組みに対する支援(以下、農村地域の振興)」「生産技術の紹介」「販売促進に対する支援(以下、販売促進)」「関係機関との連携調整」「農業者同士の連携・組織作りに関する支援(以下、農業者同士の連携)」「将来に向けたビジョンの提示(以下、ビジョンの提示)」「地域の抱えている具体的問題の指摘(以下、具体的問題指摘)」「普及指導員自身の知識・技術の獲得(以下、普及員自身の技術獲得)」「あえて何もしなかった」「その他)を尋ねた(複数回答可)。問題のタイプと支援の選択肢は、普及指導員ならびに普及事業関係者への聞き取り調査や、農林水産省による普及事業ホームページ⁶⁾を参考に選定した。

(2) 過去の普及活動の成果の自己評価

回答者の実施した各種の支援が、実際にどれだけ状況を改善したか、また、普及指導員の働きに地域住民がどれだけ満足したかを検討するため、(1)で回答してもらった過去に経験した難しい課題に直面した際の普及活動を通じて状況がどれだけ改善したか(以下、「状況改善度」)、また、地域住民が回答者本人の働きにどれだけ満足したと思うか(以下、「地域住民満足度」)を尋ねた。具体的には、「その地域に起こった困難な状況は改善したと感じますか?」という項目(状況改善度、0点[全く改善しなかった]～3点[かなり改善した])と、「全

体的に言って、その時のあなたの働きに、地域の人々はどれくらい満足していたと思いますか? 100点満点中何点かでお答えください」という項目(地域住民満足度)とに回答してもらった。

(3) 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因

「幸せを感じる」「憂鬱な気分になる」「悲しみを感じる」「誇りを感じる」など、計29項目の感情(Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Morling¹⁵⁾)のそれぞれについて、「日頃どの程度その気持ちを感じているか」を1点(全くない)から5点(非常によくある)で回答を求めた。

また、これらの感情経験との関連を検討する項目として、特定の地域を担当している普及指導員を対象に、下記の項目を測定した。

a. 地域住民の信頼性・信頼感

現在自分が担当している地域に関して、「地域の対人関係はおおむね円滑だ」「地域の人たちは、お互いを信じ合っていると思う」「地域の人たちは、基本的に善良で親切である」「地域の人たちは、基本的に正直で率直である」「地域の人たちは一般に信用できる人たちである」「地域の人たちは、他人を信用していないと思う(逆転項目)」「地域の人たちは、自分たちの地域や郷土に誇りを持っている」のそれぞれに1点(全くそう思わない)～7点(強くそう思う)の7点方式で回答を求めた。この7項目は全体として、地域の人々の信頼性(あるいは誠実性)およびお互いに対する信頼感などを測定していると考えられる(遠藤・柴内・内田¹⁶⁾を参考に作成)。

b. 地域内の問題に対処する自己能力

同じく現在の担当地域に関して、「地域の中で対人的にうまく行動する能力について自信を持っている」「地域の中で生じるおおかたの問題に私は対応できる」「地域の中で予期せぬ問題が生じたら、うまく処理する自信がない(逆転項目)」のそれぞれに1点(全くそう思わない)～7点(強くそう思う)の7点方式で回答を求めた。項目は遠藤・柴内・内田¹⁶⁾で用いられた「関係性効能感」を地域での問題処理能力測定用に改変して作成した。

c. 地域の暮らし向き

現在の担当地域の暮らし向きについて、「地域の人たちは、自分たちの暮らし向きに満足している」「地域の人たちの生活状況は問題ないものである」のそれぞれに1点(全くそう思わない)～7点(強くそう思う)の7点方式で回答を求めた。

d. 担当地域の住民との付き合いの量および質

現在の担当地域の中で、「ふだん、あいさつをかわす人」「うれしいことがあったときに、知らせたい人」「相手の居宅を訪ねる人」「電話で連絡を取る人」など、様々なタ

イプの付き合いに関して、そうした付き合いをする人が地域の中に何人ぐらいいるかを尋ねた（遠藤・柴内・内田¹⁶⁾で用いられている知り合い・親密関係項目）。

e. 直接農業者に会う時間

全業務のうち直接農業者に会って普及活動にあたる時間の比率を尋ねた（20%未満，20～40%未満，40～60%未満，60～80%未満，80%以上のうちいずれかを選択）。

(4) 尊敬する普及指導員の姿

尊敬する普及指導員の有無を各回答者に尋ね、存在する場合にはその人の性別と、何年上の人なのかを回答してもらった。また、普及指導員の普及指導という業務上の行動・心理的特性として考えられるものを41項目用意し（Table 3参照）、各項目が自分の尊敬する普及指導員に当てはまるかどうかを、「とてもよく当てはまる」、「当てはまる」、「特に当てはまらない」、の3件法で尋ねた。項目は、普及指導員ならびに普及事業関係者への聞き取り調査や、農林水産省による普及事業ホームページ、農林水産省生産局技術普及課「農業者とともに歩む普及指導員」¹³⁾、全国農業改良普及支援協会編「普及指導員養成マニュアル」¹⁴⁾を参考に選定した。自分の尊敬する普及指導員に「当てはまる」と回答された場合には1点、「とてもよく当てはまる」と回答された場合には2点を与え、そのいずれも選択されなかった場合には0点とし、項目ごとに平均得点を算出した。

3. 結果

3.1. コーディネート機能に関わる支援の有効性について

地域の抱える問題では「生産技術に係る問題」が最も多く、次いで「農業者の収益・経営状況に関わる問題」「地域全体の活性化に関わる問題」が多く、それぞれ40%以上の人を選択していた。また、全体としてどのタイプの支援が多く実施されていたかを検討したところ、

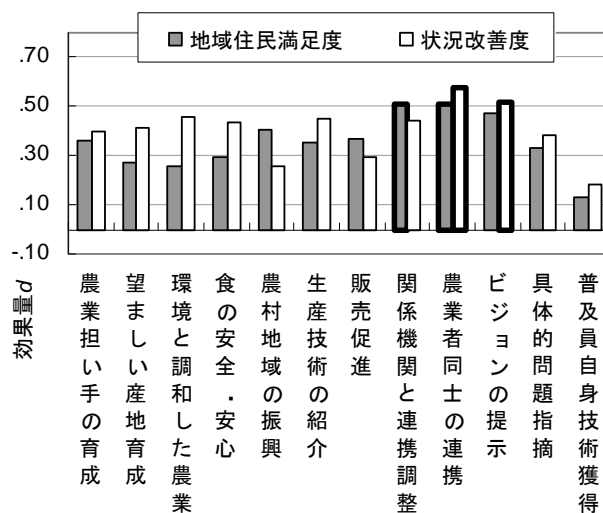


Fig. 2 地域の問題への有効な支援（太枠は効果量 Cohen's d が 0.5 以上のもの）

「生産技術の紹介」「関係機関との連携調整」が多かった。それに次いで、「農業担い手の育成」「望ましい産地育成」「農業者同士の連携」「普及員自身の技術獲得」も多く、いずれも40%以上の回答者に選択されていた。

次に、「あえて何もしなかった」「その他」以外の各支援の有効性を検討するべく、支援のタイプごとにその支援を実施したか/しなかったかを独立変数、地域住民満足度あるいは状況改善度を従属変数とする t 検定を実施し、各独立変数（各支援の実施 vs. 非実施）の効果量 (Cohen's d) を算出した。Fig. 2 に示したとおり、地域住民満足度には「関係機関との連携調整」「農業者同士の連携」の効果量が大きく、状況改善度には「農業者同士の連携」と「ビジョンの提示」の効果量が大きかった。普及指導員自身の認識する地域住民満足度・状況改善度のいずれにも、コーディネート機能に関わる支援が特に大きな効果を挙げている可能性が示唆された。

Table 1 感情経験ならびにその他の連続変数の男女別平均値

	サンプル全体			男性			女性		
	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)
ポジティブ感情	261	2.75	(.67)	194	2.74	(.66)	53	2.81	(.69)
ネガティブ感情	261	2.08	(.65)	194	2.12	(.67)	53	1.96	(.57)
地域住民の信頼性・信頼感	165	5.08	(.69)	117	5.11	(.71)	37	5.01	(.63)
地域内の問題に対処する自己能力	163	3.94	(1.02)	115	3.92	(1.02)	37	4.00	(1.02)
地域の暮らし向き	163	3.83	(1.16)	115	3.82	(1.16)	37	3.95	(1.17)
「軽い関係」の人数	146	40.42	(57.25)	105	44.03	(65.39)	33	28.42	(24.46)
「中程度の関係」の人数	145	11.83	(12.45)	103	12.11	(13.24)	33	10.36	(10.67)
「親密な関係」の人数	142	4.28	(4.66)	100	4.12	(4.49)	33	4.30	(4.87)

Table 2 普及指導員の感情経験に対する標準化偏回帰係数

	ポジティブ感情	ネガティブ感情
地域住民の信頼性・信頼感	.34***	-.19**
地域の問題に対処する自己能力	.25***	-.32***
尊敬する普及指導員の有無 (0= 無, 1= 有)	.25***	-.03
R^2	.29***	.17***

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3.2. 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因

感情についての 29 項目への回答について、主因子法による因子分析を実施したところ、固有値のパターンから 2 因子構造が示唆された。そこで、因子数を 2 に設定し、プロマックス回転をかけた因子分析を実施したところ、「ネガティブ感情」に分類されている項目（例：憂鬱な気分になる、悲しみを感じる、怒りを感じる、など）は第 1 因子に対する負荷が高く（0.40 以上）、「ポジティブ感情」（例：幸せを感じる、落ち着いた気分を感じる、うきうきした気分になる、など）に分類されている項目は第 2 因子に対する負荷が高かった（同じく、0.40 以上）。なお、因子間相関は 0.16 であった。そこで、ネガティブ感情とポジティブ感情のそれぞれで項目を平均した得点を算出した。この「ネガティブ感情得点」と「ポジティブ感情得点」を用いて、他の変数との関係を検討した。

また、「担当地域の住民との付き合いの量および質」について主因子法による因子分析を実施したところ、固有値のパターンから 3 因子構造が示唆された。そこで、因子数を 3 に設定し、プロマックス回転をかけた因子分析を実施したところ、「軽い関係」に分類される項目（「ふだん、あいさつをかかわる人」「立ち話をする人」）は第 1 因子に対する負荷が高く（0.90 以上）、「中程度の関係」に分類される項目（「電話で連絡を取る人」「その人の家や仕事場の近くに行く用がある時、連絡をとってみようと思う人」）は第 2 因子に対する負荷が高かった（0.60 以上）。また、「親密な関係」に分類される項目（「うれしいことがあったときに、知らせたい人」「悩んだ時や困った時に、話を聞いてもらいたい人」「メールで連絡を取る人」）は第 3 因子に対する負荷が高かった（0.40 以上）。なお、因子間相関は 0.35～0.52 であった。以上より、各因子に対する負荷の高かった項目をそれぞれまとめて平均し、「軽い関係」「中程度の関係」「親密な関係」の得点とした。

Table 1 の通り、ポジティブ感情、ネガティブ感情、地

域住民の信頼性・信頼感、地域内の問題に対処する自己能力、地域の暮らし向き、軽い関係の人数、中程度の関係の人数、親密な関係の人数の平均・標準偏差を男女別に確認したところ、いずれでも性差は見られなかった ($F_s < 2.29, p_s > .13$)。

次に、感情経験を従属変数、「地域住民の信頼性・信頼感」と「地域内の問題に対処する自己能力」「尊敬される普及指導員の有無」「地域の暮らし向き」「担当地域の住民との親密な関係」「直接農業者に会う時間」を独立変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行い、いずれがより感情経験を強く規定しているのかを検討した。結果、「地域の暮らし向き」「担当地域の住民との親密な関係」「直接農業者に会う時間」はいずれも独立の効果を持っていなかった。残りの 3 項目については Table 2 の通り、ポジティブ感情には「地域住民の信頼性・信頼感」が最も強い効果を持っており、地域の関係性が良好であることが業務内でのポジティブな感情経験の上昇につながっていることが明らかになった。ネガティブ感情においては自己能力の効果が大きく、問題に対処する能力が低いと知覚されるときに業務内でのネガティブな感情が経験されやすいことも示された。

3.3. 尊敬する普及指導員の姿

92% (292 名) の回答者が、尊敬する普及指導員がいる（あるいは過去にいた）と回答した。女性回答者は尊敬する普及指導員の性別に女性を選ぶ傾向が (39.3%)、男性回答者が尊敬対象として女性を選ぶ確率よりも (3.8%) 高かった ($\chi^2(N=238) = 50.27, p < .001$)。また、10 年程度上の先輩が尊敬対象となっていることが多かった(平均値:13.48, 中央値:11.00)。

Table 3 に示されているように、尊敬される普及指導員は「説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる」や「知識や技術を実際に活かす」といった特徴を持つことが明らかになった。これに次いで、「農業者の視点に立ち、相手の心を理解しようとする」「多くの知識・技術を持っている」「熱意・情熱をもって人に接している」「知識や技術を伝えるのがうまい」「新しい人間関係やネットワークを積極的に構築する」といった項目の得点が高かった。この点については、今後他業種との比較を通して、普及指導員が独自に持つ性質について検討していく必要がある。

次に、尊敬する普及指導員の特徴について、41 項目を項目内容から判断して 8 カテゴリーに分類し (Table 3 参照)、カテゴリーごとの得点と、回答者本人の普及活動の成果との相関を検討した (Table 4)。まず、地域住民満足度に対しては、「視野の広さ」「育成・統率」「情熱」が有意な効果を持っていた。状況改善度に対しては多くのカテゴリーが有意な効果を持っていたが、特に「視野の広

Table 3 尊敬される普及指導員の特徴

カテゴリー	項目	平均
知識・技術 ($\alpha = .73$)	知識や技術を実際に活かす	1.44
	多くの知識・技術を持っている	1.31
人を育成・統率する力 (育成・統率) ($\alpha = .85$)	知識や技術を伝えるのがうまい	1.28
	説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる	1.49
	人を育てる力がある	1.20
	農家や関係者に働きかけて成長を促そうとする	1.20
	地域のリーダーを見つけ、育てる	1.04
	人を引っ張り統率し、方向転換させる指導力がある	1.19
他者志向 ($\alpha = .71$)	その人の存在によって周囲に最善の行動を促すことができるカリスマ性	0.83
	農業者の視点に立ち、相手の心を理解しようとする	1.33
	農業者に自分が何を提供できるのかを考える	1.18
	農家や関係者のニーズに応じて支援したいという願望が強い	1.18
情熱 ($\alpha = .65$)	消費者の視点で考える	0.52
	熱意・情熱をもって人に接している	1.29
	強い信念を持ち、困難なことがあってもあきらめない	1.11
普及活動上のチームワーク ($\alpha = .86$)	情にもろい	0.65
	新しい人間関係やネットワークを積極的に構築する	1.27
	地域の中にいろいろな人脈を持っている	1.12
	構築された人間関係をメンテナンスし、長期にわたり保持する	1.05
	助言や情報提供してくれている人を多く抱えている	0.91
	地域の関係機関と連携し、それぞれの役割分担を行う	1.06
	周囲と連携してチームワークを形成する	1.05
	普及センター内や他の普及指導員と連携し、普及組織内で自分の役割を全うできる	1.01
	地域全体の中での自分の役割を理解し、全うしようとする	0.98
	研究機関と連携し、問題解決に必要な研究を進めてもらう	0.79
決断力・行動力 ($\alpha = .80$)	決断力がある	1.19
	自ら進んで物事に取り組む	1.18
	先例がないことにも進んで取り組む	1.09
視野の広さ ($\alpha = .71$)	物事を局部ではなく大所高所からとらえる	1.11
	時代の流れを読み、将来に向けてのビジョンを提言する	1.10
	地域全体が目指す目標や、要求する行動基準をよく理解する	0.95
緻密性・冷静さ ($\alpha = .77$)	問題の局部を分析し、本質を緻密に解明する	0.85
	冷静に自分をコントロールできる	0.78
	細部に神経をつかい、完璧にやろうとする	0.59
	問題解決又は目標達成のために必要な取組を順序立てて企画する	1.05
その他	状況を的確に判断し、臨機応変に行動を変える	1.06
	信頼・尊敬の念で周囲から見られる	1.10
	とらえどころのない現象の中から大事な問題が何かを見つけ出す	1.02
	自分の能力を信じている、自信がある	1.00
	その人の存在によって周囲が明るくなるカリスマ性	0.87
	常に話し合いの中心に位置し、話題を提供する	0.85

注：太字は最もよく選ばれたものの上位 11 項目

Table 4 尊敬する普及指導員の特徴 (カテゴリー得点) と回答者本人の普及活動の成果の相関 (Spearman)

	知識・技 術	育成・統率	他者志向	情熱	普及活動 上のチー ムワーク	決断 力・行動 力	視野の広 さ	緻密 性・冷 静さ
地域住民満足度	-0.12†	.14*	.07	.14*	.12†	.09	.15*	.04
状況改善度	-0.01	.21**	.16*	.17**	.21**	.19**	.22***	.12*

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

さ」「育成・統率」「普及活動上のチームワーク」に他より強い効果が見られた。「知識・技術」は、回答者本人の成果には正の効果を持たず、地域住民満足度には負の効

4. 考察

4.1. コーディネート機能に関わる支援の有効性について

近畿6府県の普及指導員を対象とした調査の結果、地域の抱える問題としては生産技術に関するもの、次いで、農業者の収益・経営状況や、地域全体の活性化に関わる問題が多くあげられていた。普及指導員が地域から求められ、頼られる場面の多くは、生産技術の指導に関連することであるといえよう。普及指導員の支援はこれに対応した形になっており、生産技術の紹介と関係機関との連携調整活動がよく行われていた。

一方で、地域の課題に対する有効な支援を見た結果、関係機関との連携調整や農業者同士の連携など、ネットワークの生成・維持に関わる普及活動が、普及指導員自身に知覚された地域住民の満足度や状況改善度に効果をもたらしていた。一方で「生産技術の紹介」などの技術指導に関連する直接的な支援は、地域住民満足度にも状況改善度にもあまり効果を持っていなかった。これについては1) 直接的な対処だけではなく、人や関係機関をつなぐことを通じて初めて直接的な対処が生きてくるという可能性、そして2) 実際に経験した中でも特に困難な状況を思い浮かべて回答してもらったが故に、「(機能すると期待されるはずの) 直接的な支援が機能しなかった」ような困難な状況が思い浮かべられて回答されていた可能性(つまり、通常の状態では直接的な対処は効果を持っている)が考えられる。後者の可能性について、実際に直接的な対処を行ったものの、状況改善度や地域住民満足度が低かったような場合に課題の困難度が高く認識されていたかどうかについて追加分析を行ってみたが、この可能性を支持するような分析結果は得られなかった。このため、前者の可能性が有力であることが示唆されるが、この点についてはより詳細な検証が必要であろう。また、本研究で用いられた状況改善度や住民満足度の変数は、実際の地域住民による評定ではなく、普及指導員自身による評定である。各普及活動の有効性について検討するにあたり、普及指導員自身の明示的な認識そのものを取り扱わないような分析手法を用いることで、普及指導員自身の固定観念の影響を可能な限り軽減することを本研究では試みた。今後、より客観的な従属変数が得られれば、コーディネート機能のより詳細な検証が可能になるであろう。この点は今後農業者を対象とした調査により検証する必要がある。

4.2. 普及指導員が業務の中で感じる感情とそれを規定する要因

業務の中で感じるポジティブ感情・ネガティブ感情は、本人の職務に対するモチベーションに影響し、その意

味で、普及活動の遂行に関わる重要な問題である。調査の結果、「地域住民の信頼性・信頼感が高いこと」がポジティブ感情を最も強く規定する要因であることが明らかにされた。このことは、普及指導員が担当地域に心理的にコミットしており、地域内の関係の良好性を普及指導員自身も自らの喜びとしていることを示しており、普及活動全体の中でコーディネート機能に関わる仕事が重要な位置づけを占めていることを示唆する結果である。今後の検討課題として、実際に心理的に地域にコミットしている普及員であればあるほど地域住民の信頼性もさらに高くなるのかどうかなど地域に対する普及指導員の心理的コミットメントの持つ効果を検証する必要がある。

一方、ネガティブ感情を減じるものは、地域住民の信頼性・信頼感、問題に対処する自己能力であり、とりわけ問題に対処する自己能力は重要な要因となっていた。自己能力が高く自信をもって業務を行う普及指導員は、不安や悲しみを引き起こすような失敗経験を減じている可能性がある。このような業務内での感情経験の指標は、全般的な「業務満足度」と併せて今後検討していく必要があるだろう。

4.3. 尊敬される普及指導員の特徴とその周囲への影響について

尊敬する普及指導員がいると回答した人が大多数であり、職場に何らかのロールモデルがあることが示唆された。一般に普及指導員の中では10年で一人前という感覚が共有されており、最も身近な尊敬できる対象として10年ぐらい上の人が選ばれる傾向があった。ロールモデルとなる普及指導員は、ある程度熟達した姿を見せている対象ということができよう。現場への同行や若手研修に、10年ぐらい年次の上の普及指導員を指導役として当てることには意味があるかもしれない。今後は研修指導との関連についても検討していく必要があるだろう。

尊敬される普及指導員の特徴としては、説得力と実践力で人を動かす力を持つ人物であるということが挙げられた。普及指導員のコーディネート機能の重要性に照らせば、農業者に技術を的確に伝えるコミュニケーション能力、さらには相手のニーズや社会的立場等を的確に理解する洞察力の重要性が理解され、そうしたスキルを持つ人物が尊敬されているということができよう。

2008年度近畿ブロック普及活動研究会の報告¹⁰⁾によると、若手の普及指導員はより技術を身につけたいと感じているのに対し、ベテランの普及指導員は若手にはコミュニケーション能力が足りないと感じているという結果が示されていた。この世代間での認知の違いは、普及経験がもたらす「尊敬すべきロールモデル」の違いとしても表れている可能性がある。若手は技術力を通して自信を身につけたいということであろうが、コミュニケー

ション能力とセットで学ぶことにより、成果が期待できるのではと考えられる。今後は他業種との比較検討を通して、果たしてコーディネート機能に関わるような対人スキルは普及指導員に特有の目指すべき特徴であるのか、それともそれは他業種においてもあてはまることなのかどうかを探る必要があるだろう。また、本研究では広く対人スキルを取り上げたが、特にコーディネート機能において必要とされるスキルとはどのようなものなのかについても、今後検討すべき事項としてあげられる。

尊敬する普及指導員の持つ特徴の中でも、「視野の広さ」「育成・統率」「情熱」「普及活動上のチームワーク」において良い特徴を持つ先輩がいると本人も良い成果を残すことができていた。このうち特に、「育成・統率」「普及活動上のチームワーク」は、農業者を含む他者との関わりに直接的に影響する特質で、コーディネート機能に関わるものであると考えられる（「普及活動上のチームワーク」には「地域の中にいろいろな人脈を持っている」なども含まれ、必ずしも普及組織内部でのチームワークに限定されない点には留意が必要である）。その一方で、知識や技術では、こうした「促進効果」が見られなかったことから、先輩からの技術の伝達だけではなく、その技術を農業者に「いかに伝えるか」と言うことに関する研修やOJTが必要とされる考えられる。星野¹⁷⁾は「かつて新米の普及指導員は先輩の所作や言葉を横でみながら、次第に先輩の仕事を代替してきた。この課程で、『普及のワザ』をマスターしてゆくが、これは経験をベースにした暗黙知であった」と述べている。このような暗黙知の伝達につながるようなOJTのあり方については、普及指導員のコーディネート機能に関わるスキルの集合レベルでの持続性に関わる問題であり、今後も検討されるべき課題である。

4.4. 今後の課題

農業人口の減少の克服や農業生産・地域の活性化に向けての取り組みが求められる中で、普及指導員が果たす役割はどのようなものなのか。本研究からは、地域の課題解決において普及指導員の担うコーディネート機能の有効性が示されるとともに、普及指導員自身の動機づけに繋がる感情経験にも地域の信頼関係構築が関わっていることが示された。また、普及活動に関わる特質・能力の中でも、特に説得力とコミュニケーション能力で現場を動かす力が重視されていることが明らかにされた。普及活動は、技術力とコミュニケーション能力が両輪として機能して成り立っているということがあらためて示唆されたといえよう。

農業者同士、または農業者と他の関係機関をつなぐコーディネート機能を担う普及指導員の職務とは、いわば地域の「社会関係資本」（ソーシャル・キャピタル）の生

成をサポートすることといえるだろう。社会関係資本とは、人間関係やコミュニティ、グループなどが保有する信頼や規範、ネットワークなどを指し、人間社会の中にあるさまざまな価値を情動的・道具的・情緒的サポートをもたらす「資源」として捉えようとするときに重要視される概念である。社会関係資本は社会全体の効率性を生み出し、地域の結束や治安の安定をもたらすとされている（Putnam¹⁸⁾）。本研究は、普及指導員への調査から、そのコーディネート機能が農村社会の課題解決にポジティブな効果をもたらす可能性を示唆するとともに、普及指導員の職務遂行に影響する要因を明らかにすることに貢献した。このことは、普及指導員の働きが、農村社会の現場における「社会関係資本構築」において機能していることを示唆している。

普及指導員自身が地域に心理的にコミットし、「立場の違う仲間」として、現場で地域の動機づけを高めていく。その言葉が説得力を持ち、新たなビジョンを提示するものであるとき、地域の人と人、あるいは関係機関と地域が「つながり」、人の心や行動が変化するということが起きるのではないかと考えられる。また、農業者からの信頼を得て心を動かすためには、農業者の立場に立ち、情熱と謙虚さを持つことが重要であると述べられている⁷⁹⁾。地域の社会関係資本の生成に普及指導員がどのような役割を果たしているのか、農業者や関連機関への調査によってさらに明らかにしていくべきであろう。また、農業者や関連機関への調査により、「コーディネート機能がもたらす効果」を本研究とは別の視点から検証することが可能になると考えられる。さらには、普及指導員とは異なる種類の業務を行っている人たち（たとえば行政の人たちなど）との比較検討を行うことにより、普及指導員の「つなぐ役割」が持つ効果はより詳細に検討できると考えられる。

日本社会の中では、農を通じた地域のつながりや共同作業のあり方、協力の戦略が、日本の「相互協動的」メンタリティーをつくりあげてきたことが指摘されている。日本社会はアメリカ等と比較すると、暗黙の了解などのコミュニケーションスキルが頻繁に用いられ、複雑な他者理解が要求され、それによって相互の結びつきを確認している文化である。今後は、普及事業が大きな役割を占めてきたアメリカでの普及指導員の役割や感情経験との比較を通して、検証を深めていくことが必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 北山忍(1998)『自己と感情: 文化心理学による問いかけ』共立出版株式会社

- 2) 濱口恵俊(1977)『日本らしさの再発見』日本経済新聞社
- 3) Nisbett, R.E. (2004) 『木を見る西洋人・森を見る東洋人: 思考の違いはどこから生まれるか』(村本由紀子訳) ダイアモンド社 (原著 2003 年) .
- 4) 森本秀樹(2006)『ステップアップ 集落営農: 法人化とむらの和を両立させる』農山漁村文化協会.
- 5) 上田栄一(1994)『みんなで楽しく集落営農: 元気で明るい農業をめざして』サンライズ印刷(株)出版部.
- 6) 農林水産省(2010)『普及事業とは』
http://www.maff.go.jp/j/seisan/gizyutu/hukyu/h_about/index.html [2010, August 22].
- 7) 藤田康樹(2010)『農業普及指導論』東京農大出版会.
- 8) 全国農業改良普及支援協会(2009)『普及指導員とは』
<http://www.jadea.org/fukyujigyou/shidouin.html> [2010, August 22].
- 9) 川俣茂(1997)『増補 新普及指導活動論』全国農業改良普及協会.
- 10) 近畿ブロック普及活動研究会(2009.03)『若手普及指導員の育成手法』に関する調査研究『平成 20 年度調査研究報告』.
- 11) 近畿ブロック普及活動研究会(2010.03)『普及指導員育成のための OJT のあり方』に関する調査研究『平成 21 年度調査研究報告』.
- 12) 全国農業改良普及協会(1992)『進めよう自己研修・職場研修: 上手になろう普及活動の進め方』全国農業改良普及協会普及情報センター.
- 13) 農林水産省生産局技術普及課(2008.08)『農業者とともに歩む普及指導員』.
- 14) 全国農業改良普及支援協会編(2006)『普及指導員養成マニュアル』.
- 15) Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J.A.S., and Morling, B (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34(6), 741-754.
- 16) 遠藤由美, 柴内康文, 内田由紀子 (2008) 「人間関係はいかに well-being と関連するか」『関西大学経済・政治研究所 調査と資料』, 105(1), 1-28.
- 17) 星野敏(2008)「地域資源の保全とナレッジマネジメントの必要性」『農業と経済』74(8), 110-118.
- 18) Putnam, R. (2006) 『孤独なボウリング —米国コミュニティの崩壊と再生』(柴内康文訳) 柏書房 (原著 2000 年) .

謝辞

本調査にあたり、調査に回答してくださった普及指導員の皆様に御礼申し上げます。また、本調査の依頼やとりまとめにおいてお力添えを頂いた各府県主務課の皆様、平成 21 年度近畿ブロック普及活動研究会の皆様、予備調査へのご協力と貴重なコメントを頂きました平成 20 年度近畿ブロック普及活動研究会の皆様、全国農業改良普及職員協議会・農林水産省・近畿農政局のご担当者様に御礼申し上げます。

THE COORDINATION ROLES OF EXTENSION OFFICERS WITHIN JAPANESE AGRICULTURAL COMMUNITIES

Yukiko UCHIDA¹, Kosuke TAKEMURA², and Sakiko YOSHIKAWA³

¹Ph.D. Associate Professor, Kyoto University, Kokoro Research Center (E-mail:yukikou@educ.kyoto-u.ac.jp)

²Ph.D. Research fellow, Kyoto University, Kokoro Research Center (E-mail: boz.takemura@gmail.com)

³Ph.D. Professor, Kyoto University, Kokoro Research Center (E-mail:say@educ.kyoto-u.ac.jp)

This research examined the coordination role of extension officers in Japanese agricultural communities. Using a survey conducted on 319 extension officers, this study found that (1) coordinate activities such as creating social networks in extension works solves problems, (2) their positive affect is mainly predicted by the harmonious relationships in the responsible communities, (3) extension officers with the ability to encourage and direct farmers are positively evaluated as “role models,” and (4) elder extension officers with relational skills have positive impacts on younger extension officers. The implications of the role and skills of extension officers in Japanese agricultural societies are discussed.

Key Words: *Extension officers, agricultural community, coordination, social network*